

大阪 ①

府立 北野高

府立 天王寺高

毎週月曜日掲載

高校グラフィティ



思い思いのグループで合奏を楽しむ北野高のオーケストラ部員



手塚治虫



森毅さん



公式戦出場を目指して練習に励むサッカー部3年、桜井拓弥さん(中央)(天王寺高で)



岡田武史さん

江戸時代、天下の台所として栄えた大阪では、町人が自らの教養を高めようと私塾を発達させた。そうした歴史が固定観念にとらわれない実証性、合理性を好む自由な学問の気風を生み、「官」への反骨精神や、異質なものの寛容さにつながったとされる。私塾の代表の一つが、1724年設立の「懷徳堂」。身分や貧富の差を問わず漢学を教え、町人学者を育てた。鴻池ら地元豪商の支援で1869年(明治2年)の開校まで140年余り続いた。

私塾が生んだ
独創的な学風

塾を創設した福沢諭吉、日本陸軍の祖とされる大村益次郎はいずれも塾頭の経験者だ。大阪大は、学派・学説にとらわれず、独創的な学問・思想を尊ぶ学風の源流に、両私塾の存在を位置づける。ノーベル文学賞を受賞した川端康成は茨木高(同四中)出身。今宮高(同十中)OBの福井謙一は1981年に「フロンティア電子理論」でノーベル化学賞を受賞した。北野高(旧制一中)OBに手塚治虫、森毅さんのほか

ご意見は〒100・8055読売新聞東京本社高校グラフィティ取材班へ。ファクス03・3217・9908、メールkyouiku@yomiuri.com

コンクリート打ちっ放しの壁と大きな窓が現代的な印象を与える。創立から135年。大阪府立北野高(大阪市淀川区)は、大阪一の伝統校だが、校舎は真新しい。5年前に建て替えられたばかりだ。設計したのは、OBの建築家で京都大准教授の竹山聖(53)。その意匠には、学校のイメージを超える斬新な工夫が随所に見える。中庭を囲うように、長方形の校舎と円形のホール、正方形の会議棟を配し、渡り廊下でつなぐ構造もその一つ。

「個性の調和を重んじる校風を表現したかった」と、竹山は語る。7月下旬の昼下がり、校舎3階の音楽室から幾つもの楽器の音色が聞こえてきた。奏でるのは、オーケストラ部の部員たち、総勢47人。ドボルザークの交響曲第8番が今年の課題曲だが、発表するのは年が明けてから。そのせいか、どこかのんびりとしたムードが漂う。バイオリンやクラリネットなどでアンサンブルに興じる一団もあれば、一人でチェロのパートを弾く部員の姿も。それぞれが気の向くまま。部長の2年川田隆(16)は、そんな雰囲気が入っている。中学時代は吹奏楽部でクラリネットを吹いていた。当時はコンテストで上位に入るために必死だった。しかし、今は違う。

「勝つことだけに価値を見いだすのはおかしい。競うことより大切なものがある」と、川田は思う。創部は1932年。しかし、その調べは、太平洋戦争が始まると断ち切られた。「敵性思想の温床」として、楽器や楽譜は処分された。軍国主義一色の時代。ところが、それに染まらない教師もいた。美術の岡島吉郎(1904〜79)だ。漫画家手塚治虫(1928〜89)の恩師。軍事教練の教官に

リベラルな雰囲気があった。色々とあってええやないかってね」。反発するでなし迎合するでなし。社会との絶妙な距離感はこのころに培った。敷地の一角に、旧校舎のタイル張りの壁が保存されている。空襲で受けた機銃掃射の弾痕が20か所以上残る。手前に「殉難碑」。校庭で犠牲になった生徒2人の名前を刻む。オケ部は、戦後すぐに活動を再開した。ファゴットなど足りない楽器を部員が手作りし、調べを継いだ。

カー日本代表監督に返り咲いたことを知らせるはがきだった。天王寺高は、北野高創立から23年後、その生徒を分割する形で誕生した。校訓の「質実剛健」を体現するのがまさに岡田だと、福田は思う。長髪に太めのズボン。現在の秀才風の風貌とは裏腹に、ツツパリだった岡田を時にははかりつけながらも優しく見守ったのが、福田だった。「ただ者じゃない」。岡田にそんな印象を抱いたのは、サッカー部の

「自己を貫く」
反骨と寛容の精神
芯の通った人材育てる源

部室でサッカー文庫を見たとき。当時、サッカー部には指導者がいなかった。どうしたら強くなれるだろうか。負けず嫌いだっただ岡田はチームメイトを誘って強豪チームの練習を見学に行く一方、一人でサッカーの指導書を読みあさり、整理して部室に並べていた。「さして強くないチームの中で一生懸命になっていた。よほどの情熱がなければできないことではない」と福田。岡田は、「自分で考えるという当時身についていた習慣が、今の私の財産になっている」と振り返る。

(敬称略)

(大阪社会部 森 重孝)